

の流失は特にみられなかつた。両実験地共薬剤撒布后 9 週間で PCP は消失した。

結 論

- 1、山梨県有病地に於いて実施されている宮入貝殺貝に用いる規定量の PCP-Na 撒布による現地実験に於ける殺貝率は95%であつた。
- 2、土壤中の残存 PCP による宮入貝の殺貝効果は PCP 含有量 5.4mg%以下では認められなかつた。即ち薬剤撒布后 3 週間までは殺貝効果がみられた。
- 3、PCP の土壤中の残存期間は撒布后 9 週間であつた。
- 4、薬剤撒布が均等に行われにくい地形においては、特に撒布が均等に行われる様心掛けて実施すべきである。
- 5、本実験にては降雨による PCP の消失は著明ではなかつた。
- 6、これら PCP の消長は魚類等一般の被害を少く、効果的且つ経済的な PCP の撒布を行う為に極めて重要な意味があるので、土壤成分との関聯性と共に更に再検討を加える必要がある。

文 献 省 略

(本論文の詳細は北関東医学雑誌第7巻第3号に発表、尚本論文の要旨は昭和31年10月第16回日本寄生虫学会東日本支部大会にて発表した。)

10. 日本住血吸虫病の集団治療

(特に治療薬剤による副作用について)

大 田 秀 浄、 佐 藤 重 房

富士川沿岸の日本住血吸虫(以下日虫と省略)有病地の発生については、昭和31年に発表したが、その発生地原村は山梨県有病地の最南端より 15.5 km 程隔離された土地で、従つて発生した患者も日虫病に対しての治療を、1 回も受けたことのない患者のみで、集団検便により発見した患者 113 名に対し、昭和29年4月25日より6月9日に亘り、Stibnal. Fuadin. Stimon により集団治療を実施した。

現在、日虫の治療には長期間を要し、且つ副作用が強度であるため、今日の様にならざる日虫病が多発しているときに、患者自らが進んで治療対象となることを好まず、従つて数年后に肝硬変症、又は他の疾患を併発して寿命を縮めることも考えられる。先人により、これらの治療成績及び治療薬剤による副作用について報告されているが、再びこれらの成績を発表し、如何に本病の治療に農民は積極的に治療を望まず、治療そのものが農民の苦痛の種になつていくかを報告する。

実 験 成 績

- 1、集団検便にて発見された日本住血吸虫卵排卵者の自覚症状
- 2、集団検便にて発見された日本住血吸虫卵排卵者の他覚症状、特に肝臓肥大について
- 3、日本住血吸虫病の集団治療方法及び量
- 4、日本住血吸虫病の治療薬剤による副作用

イ、各治療薬剤の副作用及び強度

ロ、各治療薬剤の副作用の持続時間

5、各治療薬剤の治療成績

何れも詳細は省略

総 括

1、富士川沿岸に新たに発見された新有病地原村の日本住血吸虫病の106名の自覚症状は全身倦怠をのぞけば殆んどが無自覚の状態であつた。

2、これらの集団検便により発見された本虫卵排卵者の肝臓肥大の状態は113名中60名(53.09%)に触知し、硬く触知する者は60名中44名(73.33%)であつた。脾臓を触知した者は1名であつた。

3、これらの患者に Stibnal (72名)、Fuadin (30名)、Stimon (10名)により治療を行い、Stibnal は20回隔日、Fuadin, Stimon は15回隔日を1クールとした。

4、副作用の発現注射回数は Stibnal は10回までに 85.18%に発現、Fuadin は10回までに全例発現、Stimon も同様10回までに発現をみた。

5、Stibnal、Fuadin、Stimon 各れも全身倦怠、食慾不振、関節痛、悪心、嘔吐、頭痛を多く訴え、副作用なきものは Stibnal は72名中11名(15.27%)、Fuadin は1名もなく、Stimon は10名中1名にすぎなかつた。又強度もⅡ、Ⅲが過半数に認められた。

6、副作用の持続時間は24~48時間が多く、1時的なものは咳嗽のみであつた。(咳嗽はStibnalのみ)

7、治療後の検便成績は治療終了1カ月後に Stibnal は96.93%、Fuadin は94.45%、Stimon は100%の陰転率であつた。

結 語

今回日本住血吸虫病として新たに発見された富士川沿岸原村の患者の自覚症状は殆んどが無自覚の患者にて、今日の有病地の患者の排卵数から推察しても感染虫体は非常に少く、且つ本虫の生態からみて排卵数は少いことが考えられるので、集団検便特に集卵法により患者の発見につとめるべきである。

感染より余り年月のたたない本村の住民が無自覚でありながら肝臓の肥大を多数に認めることは、数年後には肝硬変、又は他の余病併発により寿命を短縮する運命にあることを痛感させられる。このことは今日の有病地の住民にもこの運命にあることを再認識させられる。

参 考 文 献 省 略

(本論文の詳細は臨床消化器病学第5巻第7号に発表、尚本論文の要旨は昭和31年4月第25回日本寄生虫学会総会に発表した。)